

膵癌患者における初診時の栄養状態と予後との相関関係について  
三重県立総合医療センター 消化器内科 森谷勲、外科 池田哲也

【目的】悪性腫瘍患者においては栄養状態が予後に関連していることが指摘されており、栄養状態の改善が予後の改善につながるという報告も近年増えてきている。栄養状態と予後との関連について明らかにするため、今回は膵癌患者に限定して初診時の栄養状態とその予後との相関関係について検討を行った。

#### 【方法】

対象患者は平成22年1月から平成25年7月までの間に膵癌の診断で入院となった患者で、死亡まで経過を追えた症例とした。総数54例(男34/女20)であり、行われた治療としては切除手術5例、化学療法あるいは放射線化学療法30例、BSC(best supportive care)のみの症例19例である。

初診時のアルブミン値 Alb、コリンエステラーゼ値 ChE、総コレステロール値 T-Cho、ヘモグロビン値、総リンパ球数 T-ly、L4 上端レベルでの大腰筋の断面積について、患者の死亡までの日数との相関について検定を行った。

#### 【結果】

患者全体では Alb、ChE、T-Cho、T-ly、大腰筋断面積で有意相関を認めた。男性患者全体では Alb、大腰筋断面積、ChE で有意な相関となった。女性患者全体では T-Cho、Alb で有意相関となった。治療種類別では男性の BSC で有意な相関を認めるほかは有意相関は認めなかった。